

能登半島地震・被災集落における住宅復興の生活文化論的検証

— 拡大家族に着目した居住と地域の持続性の論理 —

主査 山崎 寿一^{*1}

委員 山口 秀文^{*2}, 久保 佳与子^{*3}, 大倉 克男^{*4}, 金 斗煥^{*5},

本研究では、生活文化論的視点から能登半島地震被災集落・道下の住宅・集落復興の実態について、①イエと集落を持続しようとする意思、すなわち集落居住の持続意識が強いこと、②地域外親族も含めた拡大家族（イエ）の居住拠点として住宅復興意識が強く存在していること、③復興住宅における祭りや盆正月という生活文化への対応を重視していたことを明らかにした。その結果、生活文化が復興の原動力となっていることを指摘し、今後の震災復興においても、集落居住の持続性や生活文化を尊重した計画視点が重要であることを考察した。

キーワード : 1) 生活文化, 2) 能登半島地震, 3) 復興, 4) 持続性, 5) 居住, 6) 拡大家族,
7) 祭り, 8) ハナレ

Living Cultural Verification of Reconstruction of Housing in Noto Peninsula earthquake disaster area

— Logic of Dwelling and Regional Sustainability focused on an Extended Family —

Ch. Juichi Yamazaki

Mem. Hidefumi Yamaguchi, Kayoko Kubo, Katsuo Okura, and Duhan Kim

With regard to the actual situation of reconstruction of housing and rural village at Touge in Noto Peninsula earthquake disaster area, we clarified these points; (1) Strong consciousness of sustainability for village dwelling, (2) Strong consciousness of housing reconstruction as dwelling base of an extended family, (3) Taking a serious view of response to the living culture on repaired and rebuilding houses. As a result, we pointed out that living culture serves as a driving force for reconstruction, and considered that the viewpoint for planning which respected the sustainability for village dwelling and living culture was important also in future earthquake disaster reconstruction.

1. はじめに

1.1 研究の背景・目的

本研究では、能登半島地震被災集落の住宅・集落復興の実態を生活文化論的視点から検証した。研究対象は、2007年3月25日に発生した能登半島地震の最大被災地である輪島市門前町道下(とうげ)である。

筆者らは、震災後1カ月後の2007年4月30日以降、現在に至るまで約20回の現地調査を行ってきた。また調査結果についてはその都度研究発表を行ってきた^{注1)}。

筆者らの研究の前半は、震災直後の緊急性が問われる震災復興研究であり、主に住宅・集落の復興プロセス、復興の実態を明らかにした。調査の過程で、研究当初には想定していなかった新たな課題が明らかになる場合もある。今回の能登半島被災集落研究では、新たな3つの

研究課題が見つかり、それぞれ新たな研究をスタートさせている。それは、①高齢者の人的ネットワーク・居住継続要因に関する研究^{文4)}、②集落居住の持続性・通世代定住に関する研究^{文1) 3) 5)}、③住宅・集落復興における生活文化論的研究で、本研究は③の研究である。

この研究は、特に復興計画、住宅計画で見過ごされがちであった被災住民の住宅や生活文化に対する意識・価値観に着目した点が研究の動機となっている。以下の点だが、これまでの調査過程で筆者らが把握した従来の「常識」と「現実」のギャップである。

①過疎化・高齢化の著しい能登半島地震被災地では、当初高齢被災者の地域外への流出とそれに伴う地域社会の崩壊が危惧されたが、実際には高齢者の転出はほとんどなく世帯増の中心集落も存在している。この要因は何か。

^{*1} 神戸大学大学院工学研究科 教授

^{*2} 神戸大学大学院工学研究科 助教

^{*3} 神戸大学大学院工学研究科博士課程前期課程 1年

^{*4} 門前町郷土史研究会 代表幹事

^{*5} 神戸大学大学院工学研究科博士課程後期課程 2年

イエと集落を維持しようとする強い意思の存在。自分の代でこの地域での居住を途切れさせたくないという「集落居住の持続性」がこれまでの調査で把握されている。このことをさらに検証したい。

②後期高齢世帯は住宅を再建せず、公営住宅やグループホームに居住することが想定されていたが、実際には住宅再建が早々に行われた。何故か。

「次の正月に家族が戻ってくる住宅がないとかわいそう」という高齢者の言葉に代表されるように、住宅は自分たちだけの住宅ではなく地域外の兄弟、子供の家でもあるという意識の存在（拡大家族の居住拠点）。故に間取りも、盆正月の最大宿泊者数に対応する広さを確保している。このことをさらに検証したい。

③復興される住宅は、地域性を欠いた住宅メーカーの画一的な住宅が大量に出現すること、景観が一変することが危惧されたが、実際には、木造戸建て、オモテ面に対して引き戸の縁側と玄関をもち、塀をつくらない住宅が多かった。何故か。

夏祭り時に、表通りに面したミセやザシキ、縁に神輿の神様に対する「お供え」を飾る生活文化が存在しており、住宅再建時にそれができる住宅という条件を付けたということだった。この点を確認したい。

④さらなる研究課題・研究の発展方向

従来の住基台帳に登録されている「世帯」では、住宅復興の要因、住宅に対する居住者の要求は把握できない。

世帯とは異なる盆や祭、農繁期や親の介護、家産の管理のために定期的に帰還するものをも含む「拡大家族」の存在に目を向けた住宅計画、地域計画の理論構築を目指したい。

また、そこには一世代というタイムスパンではないイエと集落の持続性に関する強い意識が存在している。

本研究では「通世代定住」という視点からイエと集落の持続性を課題とした新たな計画理論の構築の糸口を見つけた。

1.2 研究方法

以下の二つの具体的な調査を行い、分析考察する。

(1)夏祭り調査：道下における祭礼には、1年を通して、春祭り（4月）、夏祭り（7月）、おんねも祭り（12月）等がある^{注2)}。本研究では、集落を練り歩く行列、各住宅のしつらえの変化という集落空間・住宅との関係がみられる集落最大の夏祭りを調査対象とした。その夏祭りの運営や順路、参加の仕方を把握し、再建住宅・修復住宅の祭りにおけるしつらえとその空間利用、祭り時の集落空間と祭りの関係を検証する。

(2)住宅復興調査：復興住宅を修復住宅と再建住宅に分け、①伝統的な六つ間取りを残す修復住宅、②地元建設会社による再建住宅、③ハウスメーカーによる再建住宅

の3つのタイプに分類した（図1-1）。その分類の典型例と考えられる1軒、ないし2軒の計5軒の住宅を抽出して住宅プランの採取とヒアリングを行い、その比較、分析から居住者が住宅復興時に重視したことや住居の使用実態を明らかにする。ちなみにこの5軒の内訳は①から1軒、②、③からそれぞれ2軒ずつとなっている。

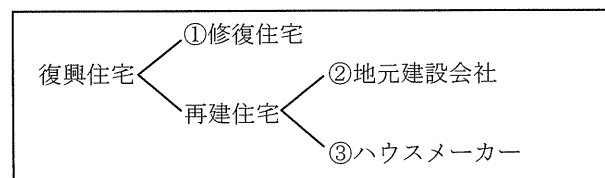


図1-1 復興住宅の分類

2. 夏祭りにみられるイエと集落の持続性

2.1 研究の方法

本章では、江戸時代より毎年7月末に行われてきた「夏祭り」を対象に、祭りにみられるイエと集落の持続性について検証する。夏祭りは震災の年には中止されたが、翌年2008年には復活し、以後、毎年行われている。

本章では2009年7月30日、31日の夏祭りで行った現地調査を基に、本研究の視点から再分析・考察する。そこでは、夏祭りの運営の仕方や巡行の順路、住民の祭りへの参加形態の把握、および夏祭り時の住宅のしつらえ、ファサードの調査を行った。さらに、2010年、2011年の夏祭りでも補足調査を行い2011年には周辺集落の夏祭りの比較調査も行った。

道下の夏祭りに見られる「お供え」をはじめとする住宅のしつらえの変化は、周辺集落である鹿磯、黒島でも行われている^{注3)}。

2.2 集落構成と祭りの関係

1) 集落と祭りの運営

夏祭りの行程、神輿の動きと集落の構成との対応を整理する。

祭の行列は、猿田彦・赤旗持ち・御洗米・太鼓台車・神輿の順で本町通りを行進し、曳山が続く（図2-1）。曳山は旧住吉神社のあった小高い丘陵地の下にある御飯屋に収納されているが、祭り時には本町通りの東端に待機し、神輿の到着と共に行列を組む。1日目（宵祭り）は、諸岡比古神社で神事を行った後、その参道を神輿が下る。そして、曳山と合流した後、本町通りを西に巡行する。集落の中心まで到達すると、神輿は御飯屋で、曳山は中町のミヤナカシャ（道の名称）の入り口で一夜を過ごす。2日目（本祭り）は、中町から西町、栄町の波よけ地蔵まで行って折り返し、再び御飯屋に到着すると、曳山を収納して巡行行事を終えることになる（図2-2）。

祭時には、集落の東西軸となる本町通り、本町通りと

御飯屋（旧住吉神社）を結ぶミヤナカシャという「軸」が浮かび上がる。また、集落の東西の入口となる場所、神社、御飯屋、地蔵などの共同空間の立地に着目すると伝統的な集落空間の構成が可視化される。

2) 集落の社会組織と参加形態

道下集落は約 300 戸からなる諸岡地区の中心集落である。この集落は 9 つの町内会から構成されており、さらに祭りの運営単位となる 3 つの組が存在している。本町通りの東町、中町、西町が中心になり、東町・元町・鎌川町、中町・北町・宮町、西町・大蔵町・栄町という 3 つの組である。祭りの運営に当たる組を「当元」といい、一年ごとに交替していた。震災前は、当元が運営のすべてを担っていたが、過疎・高齢化による人手不足により、祭りを維持していくため、震災後からは 1 つの組が当元を務め、他の 2 組はその補助をするという運営体制に変更し、夏祭りを継続している（表 2-1）。

祭りには、住民以外にも、帰省者、地元小・中学生、門前高校ソフトボール部の生徒（集落内の監督宅に下宿）も参加する。祭りの参加形態は、大きく分けて運営に参加する者、行列の参列者、見物者の 3 つに分類でき、写真 2-1 のように整理する。行列を構成する人々は、集落の男性を主として、女性が旗持ちなどを手伝う形で成

表 2-1 祭り運営の当番（2009～2011 年度）

役割	人数	2009	2010	2011
当元 御神輿、曳山油、猿田彦、鞍掛・御供品、太鼓台車、御洗米、人形、御幣、御飯屋番、接待、泰燈、俳句、お休み所、榊・松準備、砂・青竹・注連縄、交通整理、集金、会計、人形宿	54 人	中町 北町 宮町	東町 元町 鎌川町	西町 大蔵町 栄町
赤旗持ち（翌年当元）	20 人	東町 元町 鎌川町	西町 大蔵町 栄町	中町 北町 宮町
曳山舵棒（前年当元）	20 人	西町 大蔵町 栄町	中町 北町 宮町	東町 元町 鎌川町

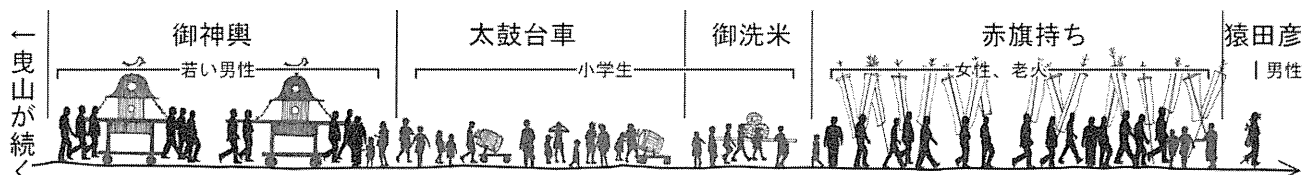


図 2-1 行列の構成

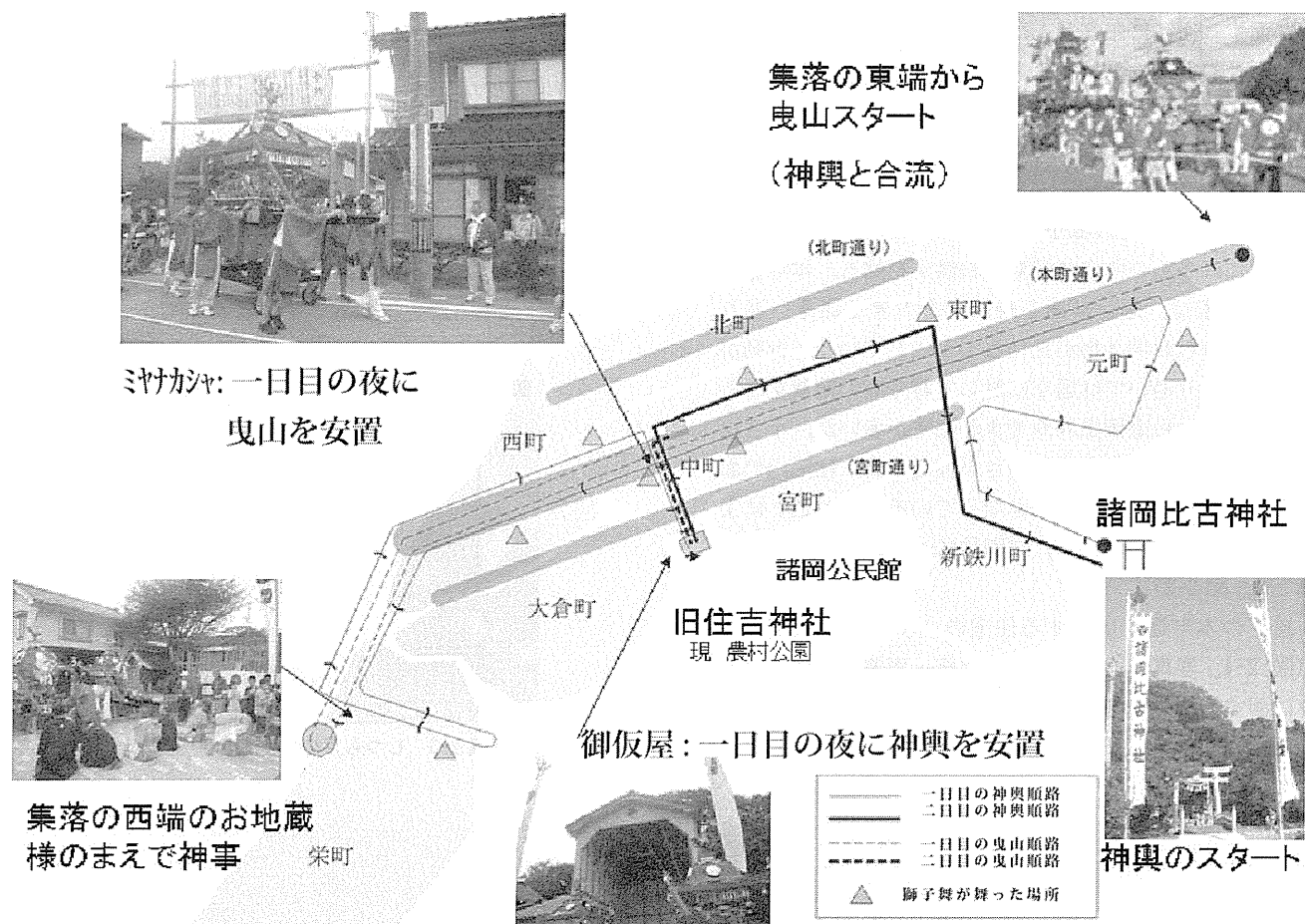
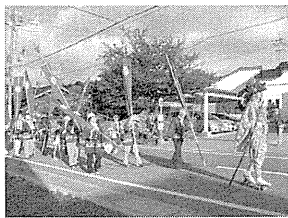


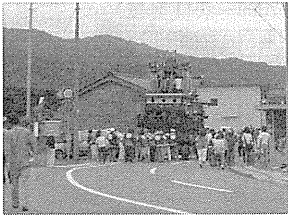
図 2-2 夏祭りの順路（2009.7 調査）



i) 行列の当番



ii) お手伝い



iii) 任意参列者



iv) 見物者

写真 2-1 祭りの参加形態 (2009.7 調査)

り立っている。太鼓や御洗米^{注4)}は地元小学生、別働隊の獅子舞・お囃子は中高生が担う。行列最後尾の曳山の後ろには、それを見守るように、帰省者である子連れの女性や、孫を連れた高齢者が連なる。そして、以上のどれにも該当しない人たちが見物者となって、行列の到達を待つことになる。男性や子供たちは行列に狩り出されるため、自然と見物者は高齢の女性に偏り、自分の家の玄関先が本町通りに出てすぐの場所に落ち着く。本町通りに面する住宅に住まう人は、行列が通過する際、座敷に飾ったお供え物が見えるように、開口を開く必要があるため、玄関先にて待機して見物する。

2.3 住宅と祭りの関係

1) 住宅ファサードの様子

祭時には多くの住宅が幔幕やお供えを飾る。本町通り沿いの各家は、巡行が通る時に戸を大きく開き、通り（神輿）からお供え物が見えるようにしている。行列が通る本町通り沿いでは通りに対して塀や高い植栽をつくらず縁部分から直接出入りできる住宅が多いが、小さな庭をつくっている場合にも高さが抑えられ、住宅内のお供えが通りから見えるようになっている。そのことにより通りと住宅内が視覚的、空間的につながっている（写真 2-2、図 2-3）。

道下の本町通りに面する住宅のプランの一例を示す（図 2-4、写真 2-3）。通りの北側、南側ともに本町通りに面する側の 1 階部分は座敷と縁があり、引き戸にして直接通りに出られるようになっている。

2009 年 7 月のファサード調査の結果、開口部について、中町においては 23 軒全ての住宅の玄関が引き戸となっているが、鯉川町では 21 軒中 4 軒に開き戸の玄関が見られる。伝統的なファサードを残していない再建住宅（写真 2-4）においても、本町通り側の居室は引き戸

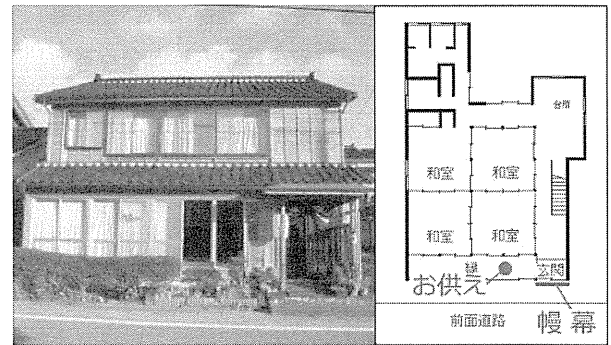


写真 2-2 住宅ファサードと間取り図 (W 邸)

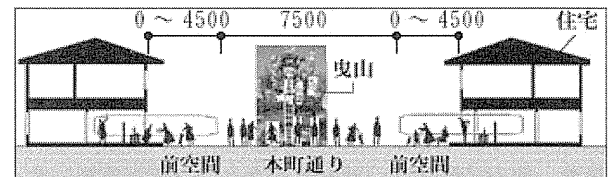


図 2-3 行列と住宅内の空間的つながり

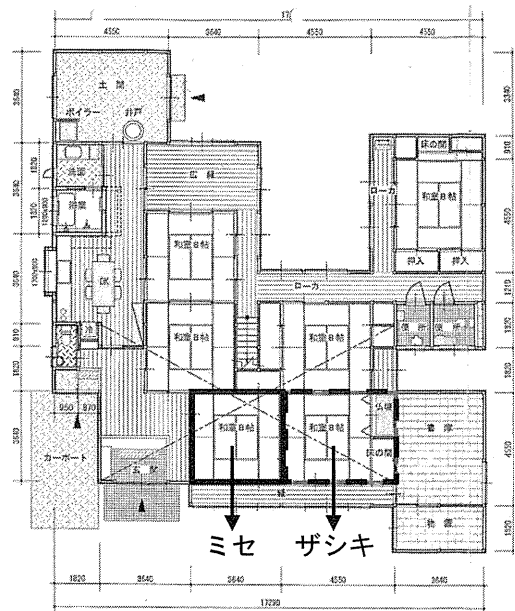


図 2-4 しつらえと平面の関係 (I 邸) 文 2)

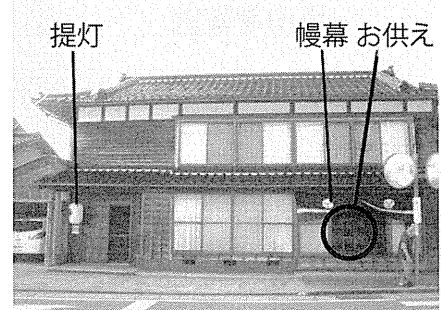


写真 2-3 しつらえの様子 (I 邸) 文 2)

となっている。

2) 祭時のしつらえ

道下の夏祭り時、各家では幔幕と提灯が飾られ、曳山



写真 2-4 本町通り沿いの再建型住宅 (T 邸)

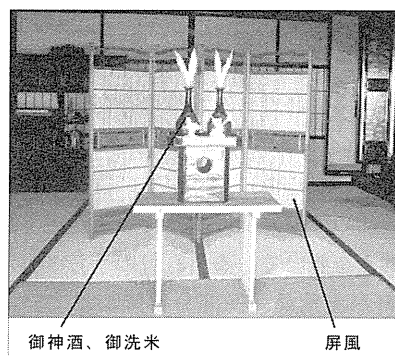


写真 2-5 一般的なお供え (2009. 7 撮影)

や神輿の巡行に面した家々では、座敷に机を置いて屏風を立てて、御洗米と銚子に御神酒をお供えしている (図 2-4, 写真 2-3, 2-5)。お供えについて見るとそれぞれの住宅によって少しずつ形や大きさが違っている (写真 2-6)。屏風、机、三方、銚子の大きさや柄は家によって様々で、その横に花を飾ったりお酒を置いたりしている家も見られ、机に布をかぶせてきれいに見せているものもある。しかし、基本的には写真 2-5 のように、屏風を立て、机の上に三方を置き、御洗米と銚子に入れた御神酒を 2 つずつ並べている。また、形はそれぞれに違うが銚子の上には紙や木でつくられた羽のような飾りがのせられている。

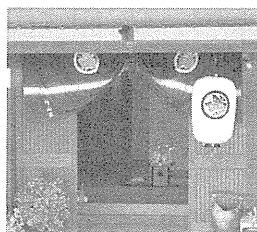
巡行が通る直前まで引き戸やカーテンが閉められ、お供えは表から見えない。曳山や神輿が近づくと開けて通りに対して開き、通り過ぎると再びカーテンを閉めていた。また、神輿の後に御洗米を集める役が各戸のお供え



ザシキ・ミセ (2009. 7 撮影)



和室 (2010. 7 撮影)



玄関 (2010. 7 撮影)



御神酒・御洗米 (2009. 7 撮影)

写真 2-6 様々なお供え

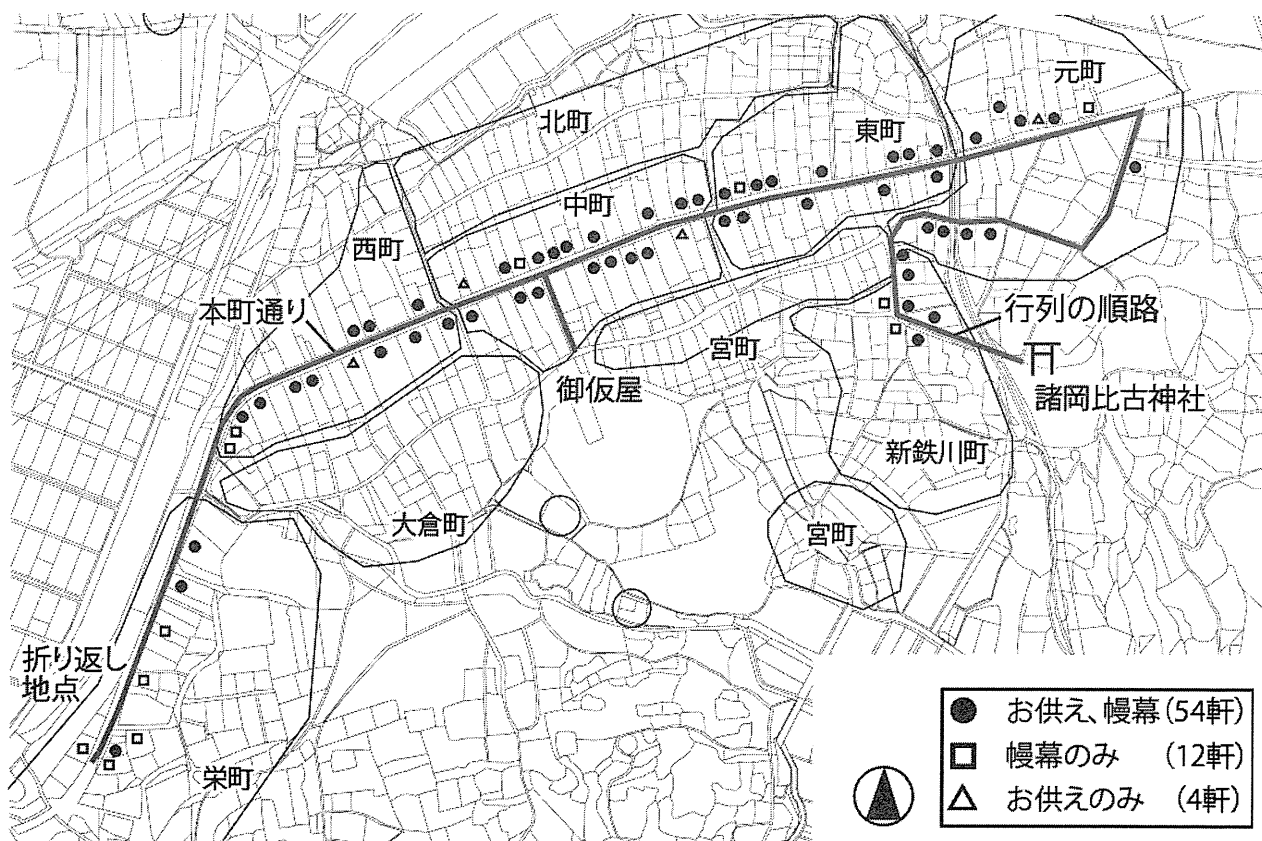


図 2-5 順路沿いにおけるお供え・幔幕の分布図 (2010. 7 調査)

のお米を集める。

このことから、この幔幕や御供えにはただの装飾ではなく、神様（神輿）に対する意識の存在を確認することができる。

お供えを置く場所について、座敷に置いている住宅だけでなく座敷前の縁や玄関に飾っている住宅も見られる。中町ではお供えを置いている 13 軒のうち 3 軒が座敷に置かれ、4 軒が座敷前の縁部分に置かれていた（2009 年調査時）。また、玄関に置き、玄関を大きく開いている住宅も見られ、玄関の戸もほとんどの住宅が引き戸とされていた。

3) しつらえを施す住宅の分布

祭りの順路沿いにおけるお供え・幔幕の有無を図 2-5 に示す。ここからわかるように、神輿などの行列が通るルート沿いにはお供えと幔幕の両方を飾る住宅が 54 軒、幔幕のみを飾る住宅が 12 軒、お供えのみ飾る住宅が 4 軒と計 70 軒見られた。このことから、ルート上では多くの住宅で何らかのしつらえの変化が見られ、お供えと幔幕両方の飾りつけを行う住宅が最も多いことが分かった。

次に、本町通りに面する中町と面しないが神輿が通る鍬川町、通らない北町でのお供え・幔幕の有無を表 2-2 に示す。

行列が通る中町の住宅を見ると 23 軒のうち 13 軒がお供えをしている。幔幕だけを掛けている住宅を含めると 15 軒が本町通りに対して飾りつけを行っている。行列の通らない北町ではお供えをしている住宅は 31 軒のうち 0 軒である一方、幔幕は 16 軒見られる。

表 2-2 飾りつけの有無（2009. 7）

	軒数	幔幕	お供え
中町	23	15	13
北町	31	16	0
鍬川町	21	9	3

※ 数値 = 件数

同じく本町通りに面しないが神輿の通る鍬川町の家では、21 軒のうち 3 軒にお供えが見られる。また東町、西町の本町通り沿いに多くお供えをしている家が見られることから巡行の通る本町通りに面する住宅にお供えをする家が多いことが分かる。

この幔幕・お供え・提灯は、各家庭においてそれぞれの様式で伝統的に続けられてきたしつらえである。しかし 10 年前、これらのしつらえや法被などを統一していく方針が集落で合意され、今日に至っている。巡行が通る道に面していない住宅にも幔幕等が普及し出したのは、これが発端となったと言われており、この祭りが神輿の通る本町通りだけのものではなく、集落全体のものであるという一体感が表れている。

本町通りと北町通りに挟まれた街区において震災復興における住宅更新の状況の塗り分けと祭り時のしつらえの有無の分布とを照合すると、その住宅更新する際の祭りへの配慮がうかがえる（図 2-6）。

住宅復興には再建と修復がある。修復住宅に比べて、再建住宅はこれからの住まい方や集落景観への意識を含む内容になっていると捉え、注目する。本町通り沿いでは再建住宅でもお供えをしており、開口部も全て引き戸

震災後の更新状況と祭り装飾の有無

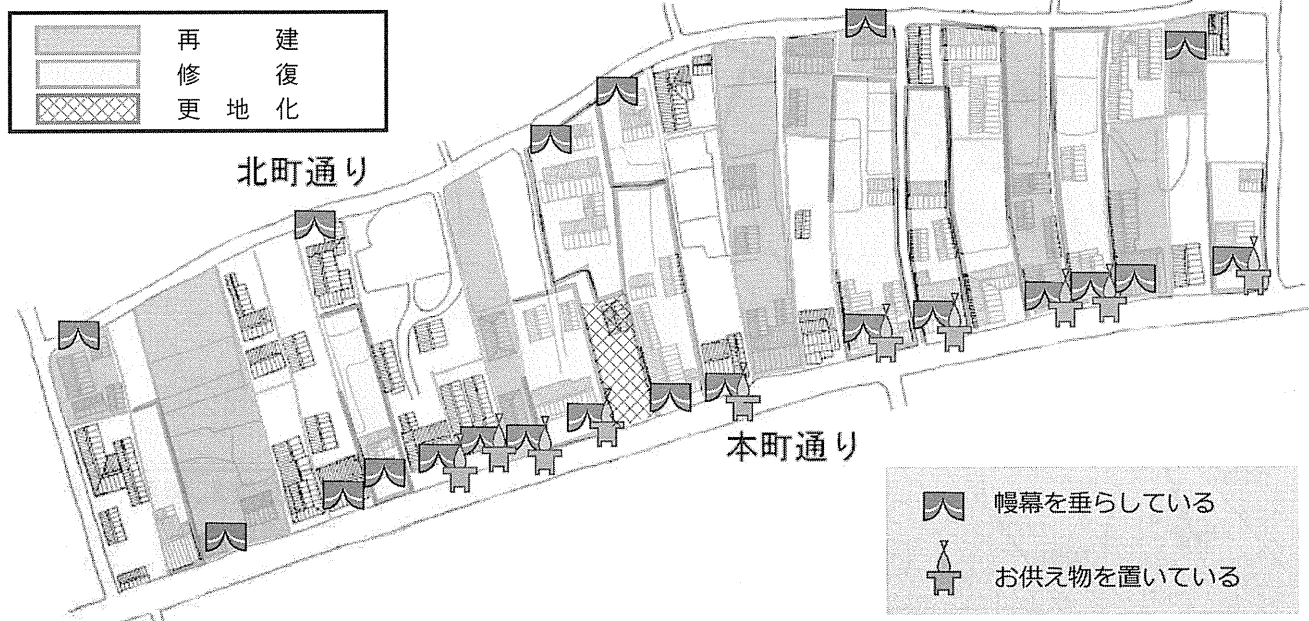


図 2-6 住宅の更新状況と祭り用装飾の有無の関係（2009. 7 調査）

となっている。また、再建住宅は座敷ではなく居間になっているケースもいくつか見られたが、その場合も居間若しくは玄関を大きな開口とし、必ずお供えを置いている。北町通り沿いも再建した住宅は引き戸となっており、幔幕を掛けているケースが修復住宅のそれよりも多い。

以上のことから、再建住宅でも祭りの幔幕やお供えをしている住宅が多く、「通りに対して開く」という意識が本町通りに面するか否かに関わらず存在していると考えられる。

2.4 小括

①夏祭りは、集落の東西軸の中心である本町通り、その中心に位置するミヤナカジャを結ぶ「軸」を浮かび上げらせ、集落の出入口・境界となる場所、御飯屋、波よけ地蔵などの共同空間による集落空間の構造を可視化している。

また、祭りの運営については、3つの内1つの組が当元を勤め、祭り運営すべてを担うという震災前の体制から、震災後、1つの組が当元を務め、他の2組はその補助をするという体制へと変更された。このような運営体制の変更により、集落の重要な行事である夏祭りを継続している。

②本町通り沿いの住宅は、通りに対して塀や高い植栽を設けず、縁付近から直接出入りできるものが多い。プランは1階の通り側は座敷と縁が占めており、引き戸による大きな開口部が構成されている。そのことにより通りと住宅内部が視覚的・空間的につながっている。

これは、祭時に座敷または玄関にお供えを飾り、神様の坐す神輿が住宅前を巡行する時にその開口を大きく開いて見せるためであると考えられる。この祭時の習慣がそのファサードの決定のひとつの要因になっているといえる。

③本町通りに面する中町の住宅については半数以上がお供えや幔幕を飾っている。巡行の通らない北町でも約半数の住宅が幔幕を掛けており、集落全体で祭りと住宅の関係がうかがえる。震災により再建・修復した住宅においても同じ傾向がみられる。

3. 復興住宅の特徴と生活文化の関係

3.1 調査方法

本章は道下集落における全復興住宅の震災2年後の修復、再建、更地化などの状況の調査^{文2)} (図 3-1)、及び2009年、2010年の夏祭りにおける「お供え」に関する調査(第2章)の2つを受けて行った調査を基にしている。

1.3で述べた通り、本章では既往研究・震災後からの継続的な現地調査から復興住宅を3つに分類し、それぞれから典型と思われる計5軒についてプラン採取とヒアリングを2010年10月に行った。調査対象住宅は道下における本町通り沿いにある住宅とした。これは「お供え」によるしつらえの変化が見られるのが主に本町通り沿いだからである。なお、復興住宅を前述の図1-1のように分類した理由は、プランを比較する際に伝統的な間取りと再建された現代的なプランとを比較するため、ま

復興状況		復興住宅						未復興タイプ	計
		修理 (修繕タイプ)	再建 (新築再建タイプ)						
母屋状況	母屋 非撤去	母屋 撤去						更地	
		母屋跡		付属棟跡	その他		付属棟 居住棟化		
		同規模	小規模	小規模	同規模・小規模	同規模			
敷地状況パターン	A	B	C	その他1	その他2	その他3	D	E	
敷地モデル図									
事例写真									
備考		震災前と変化無	—	—	—	二世帯	売却地に建つ	付属棟を改修	—
現住	件数	152	36	33	1	1	0	6	15
	%	62.3	14.8	13.5	0.4	0.4	0	2.5	6.1
非現住	件数	15	0	2	0	0	1	1	36
	%	27.3	0	3.6	0	0	1.8	1.8	65.5
計	件数	167	36	35	1	1	1	7	51
	%	55.9	12	11.7	0.3	0.3	0.3	2.4	17.1

* 敷地モデル図の付属棟とは離れ・倉・納屋を指す。

* 公営住宅は含まない。

* 事例写真は2009年3月撮影

図 3-1 震災2年後の住宅復興タイプ—屋敷地の従前土地利用と復興住宅の対応と住宅規模からの分類^{文2)}

た、プランを考える際に地元の建設会社に頼む場合とハウスメーカーに頼む場合でのプラン上の相違点を比較するためである。また、ヒアリングは表3-1に示す主に住宅の使われ方と再建時に考慮したことの2点について行った。以下では、その結果を表3-2にまとめ、各項目を分析していく。

表3-1 ヒアリング項目

1.現住者の家族構成
2.家族が集まる際の最大人数とその内訳
3.納屋やハナレの震災時、震災後の機能
4.日常での各部屋の使われ方
5.親戚の帰省時の各部屋の使われ方
6.冠婚葬祭、年中行事
7.再建時に考慮した事項 ・夏祭り時のお供えなどの飾り ・寝室の有無 ・仏壇 ・親類などの帰省

表3-2 2010. 10住宅調査復興住宅一覧(平面図、ヒアリング項目のまとめ)

分類	修復住宅	地元建設会社による再建住宅	ハウスメーカーによる再建住宅	
名称	K1邸	S邸	T邸	H邸
平面図 (下側:本通り) ※M邸除く				
居住者数 (日常時)	2人	1人	2人	1人
最大滞在者 (居住者+帰省者)	11人(2人+9人) 【子世帯】	8人(1人+7人) 【子世帯】	10人(2人+8人) 【子世帯】	8人(1人+7人) 【兄弟・子世帯】
仏壇の位置	位置を指定	位置を指定	位置を指定	位置指定はなし
帰省者宿泊	考慮した	考慮した	考慮した	考慮していない
お供え	考慮した	考慮した	考慮していない	考慮した
その他	考慮した	考慮した	考慮した	考慮した
お供えの有無	お供えをする	お供えをする	お供えをする	お供えをする
ハナレの有無	有り(S50's後半建設) 主屋と接続	有り(S50's後半建設) 主屋と接続	有り(S50's後半建設) 主屋と接続	有り(S50's後半建設) 主屋と別棟
凡例	○…日常時寝室	○…親類宿泊時寝室	■…お供え(夏祭り時)	△…仏壇

3.2 能登における伝統的住宅の使われ方

1) 能登の伝統的住宅の分類

まずこの地方における伝統的な住宅について説明する。『石川県の民家』^{文10)}によれば、能登の民家は3つの型に分類され、能登Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型としている。能登Ⅰ型、能登Ⅱ型では土間に面して表にオエ、またはチャノマと呼ばれる広間をとり、広間裏にカッテと寝間を並べ、上手に座敷を加えた形になっている。

このうち、カッテが土間に張り出すものをⅠ型、張り出さないものをⅡ型とする。また、能登Ⅲ型の間取りはチャノマを中心として表と上手に座敷を配って鍵座敷を構成し、下手の土間側にダイドコロを張り出している。チャノマ裏にリョウノマ、上手座敷の裏にナンドを配っている。なお、これによれば道下集落の住宅N邸は、この調査時にはすでに間取りが変わっていたが、梁組と当初材跡から元の間取りを類推すると能登Ⅱ型であったと推測されている(図3-2)。

なお、土屋^{文12)}によれば隣接する集落である黒島では「ミツボガコイ」と呼ばれる中央の中庭から採光を得る住宅が多く見られる。

2) 伝統的住宅の非日常時の生活

以上のことをふまえて、伝統的な間取りを残す修復住宅の事例としてK1邸を選び、居住者である夫妻にヒアリングを行った。

K1邸は前述の復興住宅の分類では修復住宅にあたる。震災当時、夫婦二人暮らしであったため、当初は再建を考えていたが、震災後に住宅の被災状況を見てもらった建設業者^{注5)}に伝統的で立派な六つ間取りを残すことを強く勧められたため修復することを選択した(表3-2、写真3-1)。なお、カッテやヘヤより裏にある二室は元々ハナレであったものを主屋と接続するようにしたので、これは震災前からこの状態であり、被害も少なかったため主屋が修復されるまでの間はこのハナレの部分を仮住まいの場として使用していた。

この夫婦は昭和30年代に自宅のザシキとミセで結婚式を行い、子の結婚式は昭和50年代に集落内にある諸岡公民館(昭和42年建設)で式を挙げていた。また、ヒアリングを行った他の4軒でも、結婚式は昭和30年代頃までは各家で行い、昭和40年代後半から50年代後半までは公民館で、T邸では、最近の平成になって子供の結婚式をホテルで行っていたことがわかった。この5軒の居住者に集落内でのこのような冠婚葬祭の場所についてもヒアリングした結果、自宅で行っていたものが公民館で行うようになり、近年では結婚式はホテル、葬式はセレモニー会館で行うようになったことがわかった。

S邸は、震災前は昭和6年に建てられた能登の伝統的な間取りの住宅であったが、冠婚葬祭を家で行わなくな

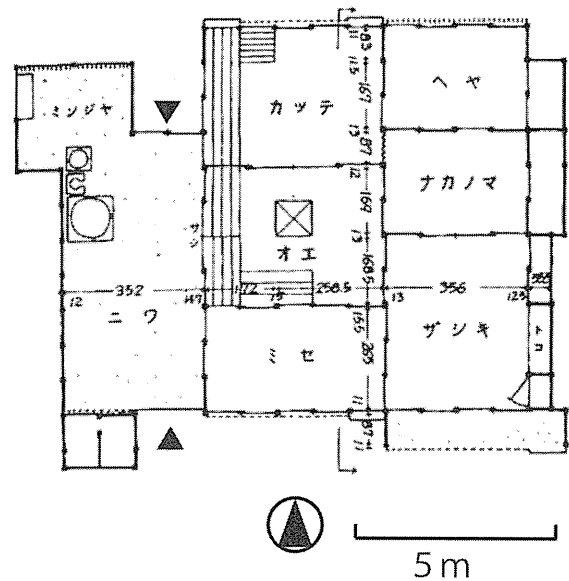


図3-2 N邸(1970年調査)(出典『石川県の民家』^{文10)})



写真3-1 K1邸(2010.7調査)

ったことを受けザシキを二間続きから一つにして再建した事例である(表3-2)。

3.4 再建住宅の使われ方

1) 盆・正月での使われ方

道下集落では普段は一人、あるいは二人暮らしにも関わらず広い部屋をとっていたり、多くの居室を持っている再建住宅が多い。

盆・正月には親族が帰省し普段の居住者数よりも増える。表3-2示す最大滞在者数より、日常夫婦2名の居住者が盆正月には、K1邸では11名に、T邸では10名に、高齢単身世帯であるS邸・K2では8名になっており、住宅再建にさしいて、帰省者の宿泊を考慮していることがわかった(S邸、T邸、K2邸)。

以下、具体事例で説明する。

前述のS邸は、地元建設会社による再建住宅である。高齢女性の一人暮らしであるにも関わらず、寝室とは別に10畳のザシキが通りに面した位置にある。日常時、家主はここを居間のように使用し、友人が来た時は畳敷きの玄関か、このザシキで接客を行う。盆、正月の子世

帯の帰省と宿泊（3世帯、7-8人）を考慮し、この広さのザシキとしたとのことである。また、このザシキだけでなく、納戸も宿泊場所となる。

また、ハウスメーカーによる再建住宅である K2 邸も、高齢女性の一人暮らしであるが、同様に広い和室を持っている。この場合、当初は自分一人だけで住むためより小さな物置くらいのものでいいと考えていたそうだが、地域外に住む子に進められ、子世帯の帰省時や子世帯がこの家を継ぐ予定で住宅を再建することにした。この家も、盆、正月になると兄弟や子世帯が集まり最大滞在者数は7、8人になり、この和室や多い時には居間も使用して宿泊場所としている。

また、T 邸でも地域外の子世帯に住宅を継ぐことを前提に住宅を再建している。

このように、通常の住宅を考える際だけでなく緊急性を要する復興住宅であっても日常時のことに加えて、盆、正月の帰省にまで考慮していることがわかった。また、このような住宅再建が行われるのは、集落外に居住する子世帯や親類が帰省する場所であり、自分達の世代だけではなく地域外にも住む子や孫といった通世代のためのイエと認識されているためである。このことは道下が居住者やその親類にとって一つの拠点となっていることを示すと考えられる。

2) 仏壇について

震災1年目の現地調査の際、住宅再建に当たって仏壇をどうするかという話題が住民たちの間で上がっていたことを聞いていた。そのことを確認するため、今回の調査において、仏壇の有無、その位置についてヒアリングを行った。結果、再建住宅4軒すべてに仏壇があり、うち3軒でその位置を指定していた。また、位置を指定しなかったH邸でもプランを見ると通りに面した和室に仏壇がある。

ここから、住宅再建に際して、住民にとって仏壇（の位置）が重要なものであることがわかる。そして、それが住宅は自分たちのものでなくイエのものであるという意識が存在することの表れでもあるといえる。

3) 夏祭りでの使われ方

道下集落では、2章で述べたように毎年7月30日、31日に行われる夏祭りに際し、集落の中心の通りである本町通りに面した住宅では玄関に幔幕や提灯を飾り、通りから見えるように窓やカーテンを開けた状態でお供えを飾るという習慣が見られる。

修復住宅である K1 邸の場合もやはりミセ、ザシキと通りとの間に縁があり、そこにお供えを飾っている。ザシキも通りに対して開いており非常に開放的なつくりになっていることがわかる。

S 邸（地元建設会社による再建）では、通りに面して前述の和室を要望し、そこにお供えを飾っている。

ハウスメーカーによる再建住宅である H 邸では、写真 3-2 のようにザシキと通りとの間に板敷きの内縁をつくることを要望し、そこにお供えを飾っていた。同じハウスメーカーによる K2 邸でも通りに面して仏壇をもつ和室を要望し、夏祭りではそこにお供えを行っていた。



写真 3-2 H 邸(2010.10 調査)

以上、これらの住宅平面の比較から居住者がプランを考える上で、夏祭り時のお供えに関して、本町通りを通る神輿、つまり神様に見せることができるようにザシキや和室、縁の位置を要望していたことがわかる。また居住者へのヒアリングから、多くの居住者が住宅再建時にお供えをすることを考慮していたことがわかった。

一方で、夏祭りのお供えを考慮しなかった、という住宅もあった。表 3-2 の T 邸では住宅を再建する際に以前はザシキであった部分に寝室を設けた。これは、日当たりの良い南向きに寝室をつくりたかったためであるが、その結果ザシキ（仏間）が敷地奥になり、祭りに際しお供えをザシキ（仏間）に置けないためその点は後悔したということだった。そのため、通りに面した寝室では室内が見られるため、現在では玄関にお供えを飾っている。

このように、夏祭りのお供えが可能なように再建時に設計者・工務店に要望を出し、夏祭りという生活文化に対応した住宅としていることがわかった。

3.5 ハナレの機能

1) 震災前のハナレの機能

5軒の住宅及びその他の住民からのヒアリングによれば、道下でハナレが建てられたのは昭和 40~50 年代のことで、一種のブームであったという。ハナレを建設した理由としては、「娘が結婚して家を出たために帰省してくる時のため」、「子どもが生まれたために部屋数を増やすため」、余裕室の確保など、家族構成の変化に伴い建て増しを必要としたものが多い。これは生活スタイルや居住世帯の構成の変化に伴い伝統的な六つ間取り、四つ間取りでは対応しきれなくなったことが原因であっ

たと推察される。

2) 震災直後のハナレの機能

能登半島地震によって多くの主屋が全壊、半壊する中でハナレは被害が比較的軽微なものが多くあった。これは、主屋とハナレの棟の向きが垂直であったため、揺れに対する作用が主屋とハナレで違ったことが一つの要因であったと考えられる。そうした残されたハナレの震災直後の役割について見ていくと、倒壊した家から掘り出した荷物を置く場所としてや、あるいは住宅が再建されるまでの間の仮設住宅のような役割を果たしていた事例が多くあった。そのため、仮設に入居する必要の無かった家が多いことも集落内での複数の居住者へのヒアリングでわかった。

3) 住宅再建後のハナレの機能

元々、震災前の主屋にない機能を追加する意味でつくられたのであるから、住宅再建後、ハナレは必要なくなったのかと言えばそうではない。震災前と同様、帰省してきた家族の滞在場所としての機能を果たしている事例もいくつか得られた(写真 3-3)。

また、K2 邸の家主は普段からハナレで過ごす時間が多い。これは「主屋は将来子世帯が継ぐものなので、できるだけきれいな状態で残しておきたいから」という理由からであった。

このように、ハナレは依然としてこの土地に住み続けていく上で重要な役割を果たしているといえる。



写真 3-3 T 邸ハナレ内観(2010.10 調査)

3.6 居住の拠点としての再建住宅

住宅再建時に子世帯などの帰省時の宿泊場所や仏壇に対して考慮していること、再建理由として「帰省してくる家族のため」「家を継ぐ子供のため」などの意見があることから、住宅が道下で暮らす人、その親族を含めた家族のためのものである意識、拡大家族の居住拠点となっていることがわかる。

3.7 小括

以上より、5 軒の住宅についてのヒアリング結果を表

3-2 にまとめる。図 1-1 で復興住宅を修復住宅、地元建設会社による再建住宅、ハウスメーカーによる再建住宅の 3 つに分類したが、この表 3-2 によると、修復住宅では建て起こしであるため伝統的な六つ間取りが残っているが、再建住宅にはその間取りは見られなくなっていることがわかる。

また、再建住宅では地元建設会社によるものとハウスメーカーによるものの両者ともにお供えや帰省、仏壇について考慮している家もあった。このことから、たとえハウスメーカーによる再建住宅であってもお供えや帰省といった非日常時のことを考慮して再建していることが明らかになった。

このように、道下の伝統的な住宅とは六つ間取り、四つ間取りで葬式や結婚式が家で行えるような続き間であったが、冠婚葬祭を家で行う習慣は次第になくなり、震災後再建した多くの住宅ではそのような間取りはなくなったことがわかる。

その一方で、本町通りに面した住宅では夏祭りのお供えを通り(神輿)から見える位置で行うという慣習により再建後も通りに面した部分に、ザシキやそれにあたる部屋を配置する住宅がみられた。さらに、普段は 1 人、あるいは 2 人しか住んでいない住宅でも、帰省する親族の宿泊場所を確保するために大きな部屋を用意したり、その際に距離感が保てるように普段の寝室を居間などとは別に個室として確保している例、またハナレを残すなどの工夫を行っている例が確認できた。

このように、再建住宅を計画する上では日当たり、寝食といった通常考慮されるような日常なことだけでなく、祭りによるしつらえの変化、盆、正月の親族の帰省、仏壇なども考慮し、必要があれば設計の際に要望を出していることがわかった。

また、ハナレのような付属棟は子や家族の個室、親族の帰省時の居室などの家族構成の変化や拡大家族の居住拠点を支える機能を果たすことや、震災などの非常時でも荷物置きや仮住まいの場所として有用であることがわかった。このような緊急時の役割は再建時に住民にとって大きな意味をもっていたと考えられる。

以上のように、道下では冠婚葬祭や夏祭りのお供えといった習慣、文化が住宅のプランを考える際に大きな意味を持っており、そうした住宅を建てることが親類の帰省のしやすさや集落の行事の継続につながっていると考えられる。そうした点から住宅を復興する上で上記のような生活上の習慣や文化を踏まえた視点が重要であると認識すべきであると言える。

さらに、ハナレなどの付属棟も日常や被災後の生活を支える仕組みとして機能しており重要な存在であると思われる。

4. まとめ

本研究で得られた知見をまとめる。

道下夏祭りは、ただ地域住民のためだけに存在しない。地域外親族が一年の間に帰省するきっかけを増やし、行列の参列者や見物する高齢者との交流をも容易にする。

祭りという非日常において、集落の空間構造が可視化され、伝統的な住宅だけでなく復興住宅（再建・修復）においても、通りに面してザシキや縁を設け、玄関を引き戸にし、お供えが可能となるように祭りという生活文化を反映したものとなっている。

住宅復興調査を行った5軒の住宅で、盆正月に帰省する親族を含めて最大10名程度の人数となり、その宿泊場所をザシキやハナレで確保している。設計の際に、祭り時のお供えが出来ること（ザシキや縁を設ける）、仏壇の位置を指定すること、親族が帰省できること（居住者の寝室以外に宿泊できる部屋）という要望をしている実態、地域外に住む子世帯が家を継ぐことを前提で住宅が再建されている実態を明らかにした。それらが反映され、再建する住宅を住んでいる自分達だけでなく拡大家族（イエ）に対応した住宅として捉えていることがわかった。

これらから、生活文化論的視点から能登半島地震被災集落・道下の住宅・集落復興の実態について、①イエと集落を持続しようとする意思、すなわち集落居住の持続意識が強いこと、②地域外親族も含めた拡大家族（イエ）の居住拠点として住宅復興意識が強く存在していること、③復興住宅における祭りや盆正月という生活文化への対応を重視していたことを明らかにした。

その結果、これまでに述べた盆・正月等の親族の帰省・仏壇・祭り時のお供えといった生活文化が復興の原動力となっていることが指摘でき、今後の震災復興においても、これらに基づく集落居住の持続性や生活文化を尊重した計画視点が重要である。

謝辞

本研究を行うにあたり、道下集落の住民の皆様には快く調査にご協力いただきました。また、本研究を行うにあたり、輪島市門前町諸岡地区道下区の泉靖郎区長、門前町郷土史研究会の佃和雄会長、石川県建築住宅課竹内正人氏、同三谷浩二郎氏、輪島市都市整備課に多大なるご協力をいただきました。記して謝意を表します。

<注>

- 1) 主な実績として、参考文献1)～8)を発表している。
- 2) 4月の春祭り、12月のおんねも祭りは、諸岡比古神社境内で行われる祭りである。詳しくは参考文献9)参照。
- 3) 特に黒島では、木戸を取り払う、格子戸を外す、ガラス窓を外すなど大掛かりなしつらえの変化が見られる。
- 4) 各家にお供えされている「御洗米」（神様に奉納するため

の米）を回収する係のことである。

- 5) K1 邸世帯主の知人（1959年奥能登大水害時に被災した道下の橋を建設した業者）の親族が経営する地域外の建設業者でもある。

<参考文献>

- 1) 山崎寿一：能登半島地震被災集落・道下の地域性と震災復興，日本建築学会計画系論文集第74巻第646号，pp.2617～2626，日本建築学会，2009.12
- 2) 山崎寿一・中川和樹：能登半島地震被災集落・道下の住宅復興の実態（震災後2年の復興過程）―道下集落の伝統的空間構成と復興住宅の屋敷地利用パターンの特徴に着目して―，日本建築学会計画系論文集第651号，pp.1151～1158，日本建築学会，2010.5
- 3) 山崎寿一：居住を核とした農村の持続性に関する試論―環境，コミュニティ，生活文化の持続と相互連関―，農村計画学会誌Vol.29, No.1，pp.42～49，農村計画学会，2010.6
- 4) 中川和樹・山崎寿一：農村地域の高齢者支援ネットワークと居住継続に関する考察―輪島市門前町道下の場合―，日本建築学会計画系論文集第652号，pp.1449～1454，日本建築学会，2010.6
- 5) 山崎寿一：能登半島地震被災集落・道下における通世代定住と非現住世帯の空地問題―『昭和絵図』以降の居住動向と集落変容に着目して―，日本建築学会計画系論文集第657号，pp.2599～2605，日本建築学会，2010.11
- 6) 山崎寿一・手邊徹・金斗煥：能登半島地震後の住宅復興施策の展開と災害公営住宅―輪島市門前町道下集落の災害公営住宅を事例として―，日本建築学会計画系論文集第76巻，第660号，pp.353～360，2011
- 7) 山口秀文・山崎寿一：能登半島地震被災集落の復興比較―輪島市門前町道下，鹿磯，黒島の3集落の比較を通じて―，日本建築学会住宅系研究報告会論文集6，pp.105～114，2011
- 8) 川口麻子・金斗煥・山崎寿一：能登半島地震被災集落・道下における空地の管理・活用―空地管理者の変更と震災4年後の新たな動き―，日本建築学会住宅系研究報告会論文集6，pp.115～120，2011
- 9) 門前町の祭り編集委員会編：門前町の祭り，石川県門前町教育委員会，2004
- 10) 石川県教育委員会：石川県の民家，東洋書林，1973.3
- 11) 輪島市教育委員会文化：能登・黒島の町並み―輪島市黒島地区伝統的建造物群保存対策調査報告書―，輪島市教育委員会，2008.12
- 12) 土屋敦夫，玉生雅之：石川県門前町黒島の町並み調査その2 間取りと門前町の家の特徴について，日本建築学会北陸支部研究報告集(36)，pp.375～378，日本建築学会北陸支部，1993.7

<研究協力者>

- | | |
|-------|----------------------|
| 竹田 和樹 | 神戸大学大学院工学研究科博士課程前期課程 |
| 白浜 晋平 | 神戸大学大学院工学研究科博士課程前期課程 |
| 川口 麻子 | 神戸大学大学院工学研究科博士課程前期課程 |